

十万弱の県民が辛じて島内に生存者として残留し、県民の全員が米軍に依存して生活を続けていたのです。

年齢別に、カロリー計算を基礎とした配給通帳による受給生活であり、この計算に我々は従前の手廻式タイガー計算機しか知らないのに比べ、米兵が使用する簡単な電気計算機には驚きました。米国の先進文化と物量に圧倒される我々でした。

食糧の配給も十分であり、特に煙草、粉ミルクなどは食いきれないほど豊富な配給を受けての生活でした。

個人住宅の建設も進められ、資材一切の支給が行われ、米松を主とした2×4工法でした。隣保の人々が互いに協力し合って住宅の建築が徐々に進みました。

長い二十八年にわたる米軍占領支配の年月を経過して、昭和四十七年、再び待望の故国日本に復帰の念願が達せられたのです。

私は沖縄民政府から身分が農林省補給庁へと移転し、さらに民間の食糧会社へと移り、定年まで勤めました。

台湾へ同行した母は、私と共に沖縄へ帰郷し同居していましたが、三十三年前に世を去りました。

私には三人の子があり、三人共に薬剤師として教育しましたので、子供たちの業を活かすこととし、市内久米地区内で薬局を開業し、今日に至りました。

戦災のため那覇と台北で二度も家を焼かれましたが、沖縄島民の中には家族全滅の哀れな家庭もある中で、労苦に満ちた人生ではありましたが、比較的恵まれた人生であったと感謝の念で暮らしている今日であります。

幸運の転属・転進

満州郭亮山の戦を憶う

埼玉県 飯野 又二

埼玉県大里郡岡部町で大正十二年五月五日、自作農の次男として生まれました。高等小学校を卒業する前から農作業の手伝いをしていましたが、支那事変が始まり、出征兵士を駅頭で送ったり、南京陥落などの提灯行列にも参加しました。小学校を卒業するころから

四歳年上の兄は病気で農作業ができません。したがって私が兄の代わりに家で働かざるを得なかったのです。

兄は諸手当の甲斐あり病気が快復し、徴兵検査では甲種合格となり、現役兵として支那大陸に渡り、その後直後に私は卒業したのです。

両親は私に分家に出してやるから百姓でいろと言いましたが、地力の低いわずかな土地を耕して細々と一生を送るより、他に職を求めて存分に働きたいとの強い希望がわいていました。だが、高等小学校の教育しか受けていない私に何ができるかと考えても決定打がない。しかし、当時二十歳になれば軍隊にとられる。

何を修業するにも半端な年齢となって迷っていました。ところが、陸軍兵器学校という技術を教える軍隊の学校があるから志願したらどうか、と薦める先輩がありました。この学校で勉強すれば、万一のことがあっても教わった技術が役に立つと志願を決意しました。

両親はいったんは強く反対しましたが、「お前がそうしたいのなら」と許され、「一生を生きる進路の変更だから失敗しないように」と農作業を免除してもらい、

類例の試験問題集や参考書を買ひ、独学で受験勉強に精を出しました。

試験場は東京四ツ谷の陸軍予科士官学校であり、試験問題は今でも持っていますが、国語、歴史、理科、数学でありました。受験勉強の甲斐あって、二十数倍の競争率の中から合格し、第一六五号の入校許可証を頂き、昭和十六年十一月二十七日、満十八歳でしたが、奇しくも十日後の十二月八日は大東亜戦争が勃発しました。

次に陸軍兵器学校について話します。

所在地は神奈川県相模原の淵野辺にあり、陸軍の地上兵器全般の「取扱い、修理等」の教育を実施していました。その教育課程により、学生隊（大学卒業）、幹部候補生隊（中等学校以上卒）、生徒隊（高等小学校卒）、練習隊（兵隊の教育）がありました。

教育期間は三年（陸軍工科学校時代二年）、採用人員八三〇人、生徒の階級、上等兵若しくは兵長相当、卒業すれば伍長に任官。現役で軍隊に入った兵隊からも入校者があり、私の区隊にも四人おりました。

教育内容は、

一、軍隊教練―生徒隊中隊の区隊長及区隊付下士官が担当

二、技術専門教育―技術専門の武官並に文官が担当、

三、一般教養―数学、外国語（英語）物理、化学、

図学（機械製図）それぞれの専門教官が担当教育された

四、課外教育

五、交換教育―専門外の部門については重要点については兵器全般にわたる教育があつた。

本業の技術専門教育は次の五教科に分かれていた。

一、火工―火薬、弾丸、化学兵器

一、電工―電気全般（通信機器、発電機、モーター等）

一、機工―自動車、戦車、旋盤等）

一、鍛工―大砲、機関銃、小・拳銃、溶接等

一、技工―木材加工、鞆工、観測機器

などでありました。

私は入校前志望を第一機工、第二電工にしましたが電工区隊に配属されました。電工科の授業は、電気の基礎理論から発電、電動、電流、磁場、交流・直流、整流、高周波理論、同調理論等を教わり、実務教育としては有線電話・無線電話・電話、通信演習、故障修理、探照燈の遠隔操縦等理論と実際の教育を受けました。

一般教育の教程基準は、一単位を五〇分とし、数学二五〇、化学四五、物理六五、図学三五、外国語（英語）一四〇、一般教養の重点は数学におかれ、積分の概念教育が始まったが繰上げ卒業のため打ち切られたとはいえ、一般教養は密度の濃いもので、専門高等学校に匹敵するものでありました。

学校の生徒の躰は厳しいもので、軍人として、また下級幹部として当然でありましたが、学校の日課表を見ますと、五十数年前の教育が思い出されます。

五時三〇分 起床―冷水摩擦・点呼・掃除・洗濯、

七時 朝食、七時三〇分より強制自習四〇分、

八時一〇分 朝礼・服装検査、

八時四〇分〜一〇時一〇分 第一時限、

一〇時三〇分〜一二時 第二時限、昼食、

一三時〜一四時三〇分 第三時限、

一四時五〇分〜一六時二〇分 第四時限、

一六時三〇分〜一七時三〇分 帰舎体育、

一七時三〇分〜一九時 衣服等手入・整理整頓・夕

食・入浴、

一九時〜二〇時 強制自習（一時間）、

二〇時二〇分〜二二時二〇分 強制自習（一時間）、

二二時三〇分 点呼、二二時 消燈。その間、新聞

・ラジオ無し、入浴一五分以内。

一意専心勉強である。自分のことは当然自分です。

時間厳守一秒の遅刻も許されない。気配り、目配り緊張した毎日が続く。毎日日誌を書く、反省向上の一日

である。かくして、一人前の人間、軍人、技術者と鍛えられていきました。その間もちろん、楽しみもあり、戦友のきずなは結ばれていきました。

次に佐賀の通信連隊での部隊実習について申し述べます。卒業が間近になった昭和十九年二月、開通して

間もない関門トンネルを往復して佐賀市の北にある通信連隊で五日間、内務班で一般の兵隊と起居を共にした実習が行われた。軍隊の内務班の実態はこういうものなのだとの実習である。教練には参加しなかったが実習中に雪が降り、広い営庭が真っ白になる大雪だったとのことでした。

軍隊では殴られると聞いていたが、その実態を見て、なるほど別世界だと感じました。夕食が終わると古参兵が、何かと理由をつけて殴る。素手ならまだしも、木銃で殴る。けがをしないかと心配しました。これが毎晩あるわけです。一番奥の窓際にも古参兵がいました。この兵長は現役の外、二度も召集されて弾丸の飛び交う実戦の場を何回も体験した歴戦の兵隊で、教練はすべて相済みだと、日中でも班内にいました。

私たちとその兵長だけで懇談しました。いろいろの話の中で、毎晩だれかが殴られていることに質問しました。「古参兵が毎晩だれかを殴っている。昨夜殴られた者には殴られるほどの理由がなかったと思うのに、最古参兵の貴方は見て見ぬ振りをして止めようとしな

い。何故か」と「叩き上げた兵隊でないと、弾丸の飛び交う戦場で使いものにならない。おとなしく教えただけでは撃ち合いの戦場で腰が抜け、犬死にしてください。国のためにも、本人のためにも、度胸のすわった、戦場で立派に役立つ兵隊に仕上げるために叩くの止めないのだ」と言う。「戦場は殺すか殺されるか、勝つか負けるか、命がけの戦場であるぞ」と戦闘の模様を話された。年配兵長の風格からも、この説明を納得したのである。軍隊は一般社会とは違う別世界であります。

戦況が緊迫したので、実戦部隊の増強が急務となり、我々三期生の修業予定三カ年を切り詰めて卒業させ、実戦部隊へ配属させることとなりました。したがって基礎学的には尻切れとなったのですが、実務遂行に必要な業務等に変更されたのであります。

昭和十九年三月二十日卒業式、翌日一斉に命令された任地へ、南方海域部隊配属の諸君は船待ちであるが、全国から選ばれた、純真無垢な、向学心に燃えた五十人の同期生と、二年四カ月寝食を共にして、學術・

心身共に切磋琢磨できたことは私の人生にとり大きな資本となり活動の軸となり有り難いと思っています。

「鉄は熱い内に打て」と言われますが、寸分の緩みなく厳格に鍛えられ、私は同期生の佐藤、渡辺君と共に兵器学校付けを命ぜられました。そこでは第六期生教育の区隊付下士官として務めていましたが、一カ月で転属命令が出て、満州の国境の部隊に赴任しました。

満州第一国境守備隊第四区隊付けを拝命し、孫呉行きの兵技兵約三百名の宰領助手とし奉天まで同行することになりました。釜山上陸、鮮満国境鴨緑江を渡る。列車はハルビンから東へ走る。牡丹江下車、軍司令部事務所で、第四地区隊の場所、交通の便を尋ねました。この部隊は通称第七七七部隊といい、東満国境近くの東寧の東の国境の山郭亮船口という所にあり赴任方法を丁寧に教えていただきました。国境最前線の山のこの部隊であると。

東寧行の列車は幹線鉄路を綏分河に向かって走り、綏陽から分かれて南に走り東寧は終点です。司令部の先輩に教えられた道を行く、「満州第七七七部隊連絡

所」と大書きした日本人の民家でトラックを待つ間もなく、連絡用トラックが来ました。綏芬河の橋を渡り、連山の裾の道をしばらく走り、あと一峰になったときトラックが停車しました。

これから特別軍事地域（陣地）である。雑木で柵が作られ出入者を厳重に取り締まっている分哨が置かれていました。私は下車して衛兵にあいさつし再び乗車しました。車は左に折れ、山間の谷川に沿った坂を走りました。七百メートルほど進むと営門を入る。衛兵所前にはいつでも発射できるように高射機関砲が上空に向け据えられていました。国防の最前線であることを実感しました。相当な坂道を登り、一番高所にある本部に到着したのは五月六日の夕刻でした。

部隊のある郭亮の山は、東寧平野の北に連なる山々の最東端で、ソ連との国境の天然の要衝であり、急勾配の東側の山裾のわずか先はソ連領であります。郭亮の山頂からは、遙か向こうの台地のソ軍陣地、山裾のポルタフカの集落などが一望できます。

この要衝を守るため、山懐に兵舎を建てて守備隊を

常駐し、各峰々に陣地構築したのは、支那事変の始まった昭和十二年とのことです。その後も陣地補強を計ったといいますが、私が赴任したころは工事らしい工事はありませんでした。私は新任伍長でも本部付であり、兵器簿の整理を担当していましたので、各所の陣地に登りその概要を見聞しました。

武勇、秩父（秩父宮様がお登りになった峯）、勾玉の第一線の峰々の八合目ほどの所には歩兵砲の砲座や、重機関銃の掩蓋などが各所に作られ、要所要所を連絡する散兵壕が、胸の深さに縦横に掘り巡らされてました。兵舎の後方、一段と高い三角山には第二線陣地とし、砲兵隊の陣地が構築されてました。

郭亮の頂上付近を挟み貫いて、コンクリートで構築した中隊の司令室があり、勾玉峯の頂上付近には、部隊本部の戦闘司令室が、部厚いコンクリートで作られています。この地下壕内には、貯水槽、炊事場、医務室などが整備され、多数の兵員が相当日数生活ができるように作られていました。

この部隊の守備範囲は、郭亮の峰々ばかりでなく、

東寧の平野も含まれ、平野の中央の泡子沿いには数基のトーチカが作られ巡察隊が常駐警備していました。

本隊兵舎へは、相当離れた山合いの要衝、東大川にも分遣隊を常駐、そこへ自動車で行くには国境沿いには行けない。綏芬河沿いの道を川沿いまで出て、萬鹿溝の北から山合いの道を行きます。

この部隊の主要陣地を見聞して、私は心の底で考えました。「攻撃に優る防衛なし」の諺があるが、天然の要衝を利用して堅固に見える布陣をしても、重戦車を多数有するソ連軍が、もし一個所ずつ重点的に攻撃してくるとすれば、次々と陥落させられ、ついにはいかにしようともできないのでは、と上層の幹部に申し上げたら、その幹部は「この陣地は一昼夜、敵の攻撃を食い止めていれば、その間に後方の部隊が戦闘準備を整え攻撃に転ずるのだ」と言われました。

その言葉を裏付けるように、東寧の周辺には、砲兵連隊、歩兵隊、自動車隊など多数の部隊が駐屯していたのですが、二十年八月、ソ連軍が侵入したときには、それらの部隊は大きな打撃を受け玉砕してしまったの

であります。

赴任時は歩兵五個中隊、歩兵三個中隊、工兵一個中隊の混成部隊で、部隊長は大佐、歩・砲兵太一用は佐官級将校でした。砲兵隊兵舎と陣地内官舎三棟は、コンクリート二階建て。本部、歩兵隊、工兵隊その他の建物は急造木造建てであり、兵舎の中には将棋の駒の形をした半地下式のものもありました。

部隊の兵器で特筆するものは少なく、一貫山の遠方監視所の百倍望遠鏡、武勇峯の二五倍以外は、野戦の一般部隊が装備している兵器であり、特に優れた物はありませんでした。

私が赴任して間もなく着任された阿久刀川（大佐）部隊長は、ビルマ進攻の部隊長として奮戦されました。悪戦苦闘、多数の部下を失いつつ撃退された不運の方であり、そのあいさつの中で、ビルマ戦線での苦闘の概略を話されたあと、「この地もビルマの二の舞にならないという保障はない。各自、日ごろの任務をしつかり勤め、万一の事態に備えよ」との言葉で締めくくられたが、大佐は着任時点で既に、この陣地の運命を

予期されていたのだと思います。阿久刀川部隊長はソ連侵攻のときには他部隊に転任されて、この陣地にはおられなかったが、ソ連に抑留され病死されたと聞いてます。

郭亮の頂上に監視所があり、二五倍の望遠鏡で当番兵が常にソ連領を監視し、その動きを記録していました。私は数回そこに登りソ連領を眺めました。眼下の平野は一面麦畑、三キロほど先の小山の中腹にソ連のトーチカがあるのです。その手前にポルタフカ部落、家の壁は全戸白壁で、肉眼では白い点々ですが、望遠鏡で見れば家の形も歩く人まで見えます。印象に残るのは、大型コンバインでの麦の収穫でした。私は出身が農家なので興味深く望遠鏡で眺めていました。

キャタピラで進む本体の右に大きく出っ張った作業部が付き、きれいに刈り取って進む。数歩おきに藁がパサッと落ちる。相当の速度で作業が進む。本体からは殻の入った麻袋が落とされる。その袋をトラックが拾って回る。この作業を目の当たりに見て、広大な耕地を持つ国は違うなあと感じました。麦を手でつかん

で鎌で刈り、揃えて縄で束ね、リヤカーや馬車で納屋に収納し、時を見ては脱穀していた我々の作業能率と比べて驚いたものです。

昭和十九年の秋、各中隊から兵員を抽出し、相應の兵器を携行させ、大城子南溝の兵舎に入れ、各地区隊からの抽出者と合隊させて機動部隊が編成されました。我が部隊の戦力はその分だけ低下したのです。この機動部隊の結成式に私は本部兵器係曹長と出張参列しました。持ち寄り兵器、これが機動部隊の装備かと、兵器の貧弱さに情けなさを感じました。その後、我が部隊の兵器では最高の威力がある十センチ榴弾砲の抽出の命令があり、一門がどこかへ搬出されました。

また、兵器室の中心的指導者であり、兵器学校出身の先輩である矢田准尉が転出しました。その代わりに下士官候補教育を終えたばかりの新任伍長が補充されました。この時から、私の任務は重要さを増し、急に忙しくなり、事務整理などで夜まで兵器室内で働くことが度々となりました。

我が部隊の戦力が低下していくのを憂えたのですが、

「命令なれば是非もない」であり、部隊の兵隊の士気は旺盛でした。国境の山の中の粗末な兵舎で寝起きして、日曜も祭日もない警備が続きましたが、「我らは国防の第一線にいるのだ」という意気に燃え、部隊全体の士気が緩むことはありませんでした。「こんな所に永く置かれるのは不合理だ」などの不満を表す者は一人もいませんでした。

昭和十九年十二月一日、私は「独立自動車第六七大隊付を命ず」という転属命令を受けました。この命令こそが、私の運命を苦から楽へ、死から生へと転換させたと言えます。軍隊は運隊だと言われますが、生死の境は紙一重です。兵器室の構成員が弱体化していたのに、さらに私までが転出する。残った人は大変だなあと思ひながら、国境警備隊を出発しました。

独立自動車第六七大隊は東寧の北約四キロの萬鹿溝く集落の東端にありました。通称第二三四部隊と呼ばれ、初代部隊長は「乾」の姓の名残である「丕」のマークを部隊全員が胸に付けていました。したがって略称「イヌイ部隊」ともいわれました。部隊は第三軍の直轄部

隊で、兵員と物資の輸送を任としていて、本体は四個中隊、各中隊五十車両で「いすず」の六輪貨物自動車を有し、部隊総数二百両でした。

戦闘部隊ではないので、火器は防御用として兵員に相当する小銃と下士官以上が所持する拳銃だけでした。しかし、施設は立派で、兵営内の建物は全部コンクリート建てで、各中隊の兵舎は二階建て堂々たる建物です。私が所属する材料廠は平屋建てでしたが、高い煙突を有してスチームボイラーが二基あり、事務室・修理工場・廊下までスチーム暖房が完備し、窓や玄関扉は二重開閉で保温構造も優秀でした。

廠長は本科中尉で下士官八名、専門修理工軍属三、兵技兵十五が全構成員で、国境守備隊では勤務時間に処理し切れず夜まで度々仕事をしましたが、材料廠には具体的仕事のない日もあり、軍属の仕事、作業状況も念入りに見聞したり、薪代用燃料車への改造工程の見学、自動車の内臓までよく観察できるなど、大変勉強になりました。しかし、厳寒時のエンジン始動は難しく、大変でした。

昭和二十年一月中旬から、二月下旬まで薪代用燃車での寒中輸送作戦が、厳冬期四十日間ありました。老黒山付近の山中から落葉松の丸太を駅まで搬出する訓練を兼ねた作戦です。この演習には材料廠から修理専用自動車二台・兵技兵八名、機工の先輩軍曹が班長、私は副班長として最初から参加しました。各中隊から、薪代燃車十両づつ合計四十両で実施されました。満州でもガソリン不足で「油一滴は血の一滴」と言われ、許可を受けなければガソリン走行は禁止されていました。

演習中は全員が八錐型の天幕を張り、その中で露営して四十日間生活をしました。また、車両は片道約二十キロの山の上から、落葉松の丸太を満載して老黒山駅まで二回運搬するノルマが課せられました。上手な運転手は課せられたノルマを楽に終わらせ、午後二時ごろに帰隊するのですが、下手なのは夜遅くまでかかると。夕食までに帰隊しない車を私たちが修理車で迎えに出たことも度々ありました。雪の積もった坂道を登り下りするので、前後輪とも防滑鍵を付けて走ったも

のです。鎖が切れると防滑鍵で繋ぐのが修理班の主たる仕事になるわけです。ラジエーターを凍結破損したのもあり、応急修理としてハンダ付けするなどもあるのです。代燃車による厳寒時の輸送は大変な作業でありました。

作業予定の半分が済むと、一日だけ作業を休んで、近くの部隊の風呂場で入浴しました。兵隊は毎日、燃料の薪と保温の炭を取り扱っていたのに二十日間も入浴しないで真っ黒になっていました。特に新兵の汚れようはひどい。目と歯だけが白く、手足・顔・衣服は真っ黒になりました。四十日間の練習中に仕事を休んだのはこの日だけ、入浴したのもこの一度だけでした。寒中の輸送演習では、事故とするのは火災を起こし使用不能となった車両が一台だけで、兵員は全員元気で演習を終了しました。

昼夜転倒勤務訓練というのがあり、昼夜転倒週間といつて、昼間寝て夜勤務する訓練が数回実施されます。灯火管制の中での訓練であるので仕事の能率が悪く、平常の半分ぐらいしかできないし、昼間は寝台で寝て

もぐっすり眠れない。一週間がたつてもどこことなく疲れが溜るのです。しかし、どんな状況下でも仕事ができるようにと訓練されたのですが、夜勤が続くと健康には悪いのです。

東寧の町で兵隊が最も賑わっていたのは昭和十八年だったといわれていますが、私の赴任した十九年の夏まではまだ賑やかでした。暮れから正月には、町へ外出している兵隊の数が減少したように感じました。昭和二十年二月末に寒中演習から帰ったら、〇〇部隊はもういない。〇〇部隊も移動するそうなどの噂が聞かれ、それを裏付けるように、東寧の町へ外出する兵はめっきり減りました。このころ、後方部隊が大量に沖繩や内地防衛に転出したと思われまます。

四月、大肚子川の兵器廠に兵器の部品受領に行った帰路、国境近くまで行き、郭亮の峰々をしみじみ眺めました。私が郭亮部隊にいたときは、東寧原野は一面の草原でしたが、今は大きく深い戦車壕が盛んに掘られていて、完成した壕が二列あり、三列目で何十人も作業員がシャベルで元気よく仕事をしていました。

この大きな壕でもソ連車の重戦車は阻止できず、難なく乗り越えられてしまったといえます。そのとき、何気なく国境近くで作業を見たのですが、これがはからずも郭亮の山との最後の別れとなってしまいました。

転出した戦闘部隊の後を追うように我が自動車大隊にも五月転進命令が下りました。移動先は下士官以下には極秘でありましたが、内地防衛だとだれ言うとなく皆喜んでいました。兵隊の中には現役で入営し、延長勤務で五年目を迎えた五年兵もいました。

「戦闘に直接関係ない物は全部焼却せよ」との命で、大量の書類を焼却しましたが、私も勉強のために持っていた数学・物理・電気などの本も公文書と共に焼却しました。公私の整理を中二日で済ませ、材料廠の修理専用自動車二両など戦闘用装備一切を携行して、立派に完備した兵営を出発したのは、五月七日、午前十時でした。

東寧の町から遥かに見える郭亮の山を眺めながら、私は心の中で「守備隊の皆さん御苦勞様です」と別れて来た上官の方々や戦友幾人かの顔を思い出し、何ん

となく将来が心配になりました。

列車から下車したのは朝鮮東海岸清津で、七千トンの貨物船に自動車を積み込みました。船内には大豆の入った麻袋がぎっしり積み込まれていました。米軍の飛行機が新潟港入り口へ機雷を投下したので掃海の終わるまで待機をしました。

出港三日目の夜明け、波は静まり、無事新潟港入港、翌早朝、神奈川県厚木へ。厚木駅に着くと米戦闘機が降下、ババババと機銃掃射されましたが部隊に損害はありませんでした。空襲の経験が全くない満州から帰る早々の空襲です。本土も予想外に緊迫していると危機を感じました。自動車は全部付近の山林に分散し、修理車は駐屯した小学校近くの神社に入りましたが、この神社が部隊の兵器修理所になりました。駐屯小学校は、相模線の相武台下駅近くの座間の小学校でした。

自動車燃料確保のため代燃用薪切り出し隊長を命ぜられました。そのころに横浜の大空襲がありました。薄曇りの日の真つ昼間、空襲警報のサイレンが鳴り、しばらくして、西の山奥から爆音がして、整然と編隊

を組んだB 29が銀翼を光らせて、次から次と私たちの頭上を東に向かって飛んで行くのが大きくはつきり見えました。大変な数でした。B 29に続いて双胴のP 38が飛んできて間もなく、ドカンドカンと大きな音がして煙が上り始めました。煙の方角から横浜がやられている感じでした。

後の米軍資料によれば、B 29五一七機、戦闘機百機、焼夷弾三千二百トン、市の三分一を焼き、死者四、六一六人、負傷者一万四千人を数えたといえます。このころから毎晩のように空襲警報のサイレンが鳴り、どこかで大なり小なりの空襲がありました。横浜だけでも二十数回空襲されたそうでありました。

その後も、川崎の製鉄所が操業不能になりました。広島に原子（特殊）爆弾が投下されました。ソ連軍が満州へ総攻撃をかけて来たニュースなどが刻々と入ってきました。

八月九日、未明からの不可侵条約を一方的に破棄したソ連参戦を聞いて、即座に頭に浮かんだのは郭亮陣地であり、守備隊の運命でした。陣地はソ連軍の集中

砲火を浴びているだろう。対戦車壕は戦車を阻止できただろうか。守備隊が奮戦しても援護部隊のいない戦況は孤軍奮闘の上、玉碎の運命か。私もあの陣地に残っていたらば戦死していただろうなどと、守備隊のことが強く心配でした。

終戦の詔勅は全員校庭に集合して聞けとの命令で整列しました。天皇陛下がラジオで放送されたのは、この時が初めてです。ラジオが悪かったのか、はつきりした語句は聞き取れなかったのですが、お言葉の大意は戦争はやめると理解できました。

私は座間に駐屯し、東京の蒲田で木炭代燃車製作に従事していたので、激しさを増した空襲を目撃し、武器生産のおぼつかない状況を身をもって体験していました。だから、ついに来るべきものが来たか、と感じて特別なショックはありませんでした。

終戦の翌々日の午後、私に「面会人だ、母が来た」との知らせがあり、何が起きたかと急いで面会しました。母は終戦直後の大混乱の中（特に厚木、横浜方面

はアメリカ軍が厚木飛行場に第一歩を踏み込むとて混乱していた）を女の身一人で訪ねて来たのであります。母が来た目的は、私に家を継がせることを説得するためでした。「兄は戦死した。順番だからお前が跡を継いで農業をしてくれ」という。このままにしておけば、又二は家に帰って来ないと、私の心が母に反応したのでしょうか。「解散指令があり次第家に帰る。皆とよく相談して今後の身の振り方を決める」と返事をして母を帰しました。

解散命令が出て、九月十二日郷里に向かったのですが、車中、何よりの思いは「国境守備隊にあのまま置かれていたら、今はどうなっていたらうか、ソ連軍と勇敢に戦って戦死していたらう。幸運な転属と転進で、敵の十字砲火に身をさらすことなく、今こうして無事である。天の恵と感謝すべきであろう」「郭亮の戦友はほとんど戦死したろう。死んだ気になればどんな我慢もできるはずだ、死んだ気になって頑張ろう」と固く決心しました。兄の戦死が確定したので、親兄弟の意向に沿い家と農業を継いで現在に至っております。